贈られた本「日本の心」

3月の或る日、50数年前の恩師を囲んだ懇談の席がありました。先生も相当の年配になりましたが、まだまだかくしゃくとされており、生徒であった私共の方が、老化が進んでいるような感じで、「師を越さないように」しなければいけないという冗談も出て楽しいひとときを過ごしました。

帰り際に先生から、自著の「青春に贈る論語」と「心(The soul of Japan)」を頂きました。これは、発刊直後にも贈っていただいておりましたが、特に「心」は、1898年、新渡戸稲造博士がアメリカで発行した「武士道」を分かり易く書いたものであり、私も丁度、奈良本辰也訳の本を読んでいたところでもあったので、「サムライはなぜ、これほど強い精神力をもてたのか」のサブタイトルにも或る程度理解できました。

本の中には、恥を知る・名を惜しむということが出てきます。私は、お天道様が見ているという言葉などとともに、繰り返し心に刻み行動する事により、道徳観や品性が培われていくのではないかと思っております。

新渡戸博士は、札幌農学校出身ですが、私の恩師も北大農学部の卒業です。

この内容は、町ホームページの「町長の部屋」の中でも掲載しています。ぜひご覧ください。

文芸しろさと

俳句

道に出て子猫あそべり春の暮　飯田勇一

太陽がころもがえする二月かな　一木雄一郎

白球を打つ音の冴え春兆す　山崎正行

雨脚の強し茎太水仙花　高橋芦江

繋がれし小舟にも降り春の雪　和田範子

春一番エンジン止めし耕耘機　いそべきよ

春の鯛姿正しく売られけり　飯村愛子

陽の射して蘇枋の蕾ひしめけり　仲田まちゑ

宝石のやうな一声雉の声　田所厚子

薪能嫉妬の焔闇に浮く　今瀬多代美

すれ違ふだけの道幅花菜風　鯉渕寿美恵

ふくよかに掌上にある蕗の薹　飯村昭子

梅満開雨脚太く音立てて　仲田こう

下萌ゆる草に声かけ腰おろす　阿久津あい子

深梅行父の歩幅の狭まれり　竹内幸子

ふかしたての餃子饅頭雛の町　瀬谷博子

裏山で戀の季節か山鳩の啼く　岩下美知野

短歌

八幡宮御守護の羽根をゆらしつつ今年も孫らは破魔矢持ち来る　所美恵子

大雪に親子ら雪のだるま作り真赤なバケツの帽子が似合ふ　山形式妙

雪のあした隣家の屋根は上部より少し解けきて見る間に消えぬ　藤原千代

かつて吾子を孫を抱きて今曾孫も手にせり初春の陽ぬくき庭に　青柳京子

夜を看とり帰り来し庭に水仙の緑小さく角ぐみてをり　渡辺千紗子

琴欧州に「亭々と伸びる大杉のやうに」と言葉を贈る親方　秋山愛子

水溜り凍夜の朝うすらひて春陽の中に光放てり　大森久子

出して見て又片づける不用品煙となればすつきりすべし　佐川あや

朝六時家を発つ息子を見送りぬ路面凍結に注意をうながし　杉山みちこ

紅き帽紅き前だれの地蔵尊よ子らを守らせ給えと祈る　宮本ふみ江

衣食住足りても足らぬものあり大事なものが何か欠けていて　山口栄

観梅の香りゆかしき水戸の梅千波の沼も晴れて清しき　阿良山ウメノ

えんがわにお茶一ぱいと母の里眺め絶景日本一富士　市川義子

受話器から大学受験合格と孫の笑顔が我が目に浮かぶ　岩下通子

かすかなる左手のしびれ治りおり「やまゆり荘」にてゆあみの後に　薄井ひろ

長生きは「ほどほど」がよしと寂聴尼の講話ききつつわれも諾う　枝不美

労らるる齢になりしかとふと侘し子に護られて道渡るとき　片見和枝

身も緊る重き楽の音を聞く心地朱金色に染む寒の落日　川上千代子

霏々と降る雪に耐えいたるろう梅の花の灯もいつしか消えぬ　島愛子

凍てつきに耐へ来し川辺の猫柳赤芽目に染む待ちに待つ春　多田志保子

これと言う用はなけれど離れ住む娘に電話する日曜の午後　坪井きよ子

隣家より子らの豆撒く声聞こゆ曾ての我が家思い起こせり　萩谷登喜子

西方に月が譲るごと薄らげば東方に日出でて一日始まる　和知美智子

待ちかねたる荒川静香の金メダル揚がる日の丸が涙にかすむ　冨田佐智子

川柳

講演会寝ていた人が拍手する　山本隆荘